

日本漢字音に於ける連濁と声調との関係

沼 本 克 明

Ⅰ 序

日本漢字音に於ける連濁（新濁とも）と呼ばれる事象に関して初めて詳細な分析を加えられた奥村三雄氏は取扱われた資料—天台宗・真言宗の誦經音資料—に於いて

連濁を起す漢字は原則としてその前の漢字が鼻音韻尾を持つものに限られ、
而も特に、

- (i) 去声調の漢字が前にある場合に連濁が多く認められる。
- (ii) 一般に去声調である漢字が連濁を起す事は少ない。

という傾向のある事を指摘されたが、この中(ii)の現象に関しては、補忘記の声明に於ける声調変化=即ち一般に語中語尾の去声調の存在が稀であったらしい事=を理由に、声調と連濁との関係というより、寧ろ、それを声調と複合との関係とみなしたいとされた。そして結論として『何れにせよ、去声と新濁との関係として「去声調の後の新濁が非常に多いのに対し、去声調自体の新濁は非常に少い」という様な現象が認められる事は、一応、注目に値するであろう。語の複合と声調と連濁と三つの間における相関性につき、尚よく研究すべきである』と述べ、先の(ii)の事象については結論を保留されたのである。

これに対し、桜井茂治氏は、補忘記の注記を詳細に分析された結果を、奥村氏の結果と比較され、直前の音節の四声とは特別な関係は認められず、むしろ直前の音韻的条件の方が有力な影響を及しているとされた。更に連濁を起す字そのものの四声の場合は、奥村氏の言われる出合の法則はあくまで後世の変化であって、本来的な字音語としては語中語尾における去声調も存在し得たのであるから、補忘記に於いて、去声調の連濁例が少ないのはそのまま相対的に連

濁が去声調音節で少ない事を表わしていると解すべきとされ、結果的に、奥村氏との間に、声調と連濁との関係に関しては全く相対立する結論を導き出されている。

次に小林芳規先生は、前二氏の取扱われた資料を更に遡って、院政鎌倉時代の字音読資料、訓点資料、変体漢文資料、片仮名資料を広く取り上げ、その実態を明らかにされたが、そこに於いても、声調と連濁との関係について、去声調の後に来る字の連濁例が多く、去声調自体の連濁例は無いか又は有っても僅かである事を指摘されている。但し、その事象の理由については言及されていない。(以上三者の詳細はそれぞれの論文を参照されたい。各論の出所は次の如し。以下引用の際は論文①、論文②等で示す。)

- ① 奥村三雄「字音の連濁について」(「國語國文」21の5)
- ② 桜井茂治「音韻資料としての「補忘記」下」(「國語國文」42の4)
- ③ 小林芳規「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」(「広島大学文学部紀要」29巻1号)

本稿は、上の様に特に意見の対立を見る連濁と声調との関係に関して、声調変化の観点を導入して分析を加えてみようとするものである。

筆者は先に具音に於いては、院政前半期より、去一去、上一去と声調が続いて読まれる場合、下位に立つ去声が上声に変化して読まれる事象の存在していた事、その変化は、漢字音の国語化の範疇で把握し得る事等の点について論じた。

① 連濁という事象も又漢字音の国語化という範疇で把握し得る事象であって、筆者は、これ等漢字音の国語化という範疇の中でとらえ得る諸々の事象は、個々独立に変化するのではなく、それ等の間に種々の密接した影響関係を与えながら起るものではないかと考える。字音の連濁という現象を考えるに際し、一つの観点として、先に指摘した声調変化と何らかの関係を有するのではないかと考えてみる事も、その事象の其の姿を把握する有意義な見方と考えるのである。

2 「連濁符」と「連濁」の概念規定

従来、連濁とは「上接字の影響で清音字が濁音化する事」として把握されて来た様であり、そういう把握のされ方は、「連濁符」が加えられているものは全て「連濁」であるという見方から生じている事は確かである。従って、当然無韻尾韻の後に来る濁音化の例も、それは有韻尾韻の後に来る濁音化の例に対する、連濁の異例という把握のされ方であったのは当然という事になる。然し乍ら、今字音の連濁というものを音声学的に見ると、それは既に説かれている如く前接鼻音に依る鼻音同化なのであって、鼻音韻尾以外の字が上接した場合の濁音化は全く音声環境を異にする事は明らかである。従って、この両者を一括して連濁と呼ぶ事に疑問が生じ、鼻音韻尾以外に下接する字の濁音化には、又別の原因が考えられるかも知れないのである。

その原因の一つとして、平安鎌倉時代当時各字の清・濁が音韻として不明であった字が存在したらしい事が挙げられる。この事は九条本法華經音に依って推定する事が出来る。

同書複製本21丁裏～22丁表にかけて次の如き記述がある。

『本清姓 王。閏。惑。
 新濁ノ 蓮。華。王。子。功。徳。
 本濁ノ 是。業。時。上。
 本濁新清ノ 賃。
 本新未決而濁ノ 待。説。擗。捲。言。詞。
 清濁未決而清ノ 且。待。
 清濁任意 眼。根。』

法華經の字音直読がこの期に非常に盛んであった事は残存資料や古記録に依って知り得る。本資料がその字音直読の為に資する目的で編まれた事は種々の点から理解出来る。今問題にしようとする上の記述も、まず法華經字音直読の際の原則として理解出来るであろう。

さて先の記事の各項目は、法華經の各字に、

- ① 本から清んで読む字
- ② 本は清んでいる字を新たに濁って読む字
- ③ 本から濁って読む字
- ④ 本は濁っている字を新たに清んで読む字
- ⑤ 本から濁っているか、新たに濁ったか不明であるが、濁って読む字
- ⑥ 清んで読むか濁って読むか不明であるが清んで読む字
- ⑦ 清濁どちらでもよい字

の七種の字群が有った事を示している。

①↔③、②↔④、⑤↔⑥はその内容上対立するものである。これで注目すべきは、⑤⑥⑦の項目が特に立てられている点である。

我々は一つの前提として、各時代の共時態としての字音の清濁は、各字ごとに明確に定まっていたと考えがちであるが、その様な常識的な前提が必ずしも事実に合致しない事をこれ等の項目は示している。仮りに、当時この法華經音の編者が、各字の清濁を全て明確に規範意識として持っていたならば一言い換えれば各字の音韻としての清濁が明確であったならば一全ての漢字は①②③④の各項のどれかに含め得たはずである。つまりこの⑤⑥⑦の項目は当時法華經音説の際各字の清濁が知識上決定出来ない一群の漢字の存在していた事を示すものと解釈出来るのである。⑤⑥に位置づけされている実例の中「[○]世[○]」[○]「[○]世[○]」の如く同一字が清音にも濁音にも読まれるのは、この字が本々清んでいるものか濁っているものか決定出来ない為の現象と考えられよう。

これに関連して注目すべきは、⑤⑥に位置づけされている例字の全てが韻鏡の所謂「全濁字」であるという事である。全濁字は本邦呉音の場合濁音となると説かれているが、それは大勢としては言い得ても、各字についてみればかなりの異例が存するのである。この原因には勿論既に脱かれている如く、呉音の基盤となった支那方言自体にも大きな要因が有ったであろう。又別に、呉音と漢音との知識上の混同という事も考えられよう。全濁字は呉音で濁音、漢音で清音となるという大ざっぱな傾向は認められる所である。その他、斯く当時各

字の清濁不明である状況を引き起した原因は種々考えられるであろうが、本稿では目的が他に有るので詳細は別に論じる事にする。

連濁とは「清音字が上字の影響に依って新たに濁音化する」事であるから、各字の清・濁が音韻上定まっている事が必須の前提条件である。しかるに述べ来た如く、音韻上の清濁が浮動しているものがあるとすると、理論上、連濁であっても本濁に、又逆に本濁であっても連濁に誤認される可能性が存する事になるのである。

次に、以上の推論を、連濁符号の面から眺める事にする。

先の九条本法華經音を引用した部分には声点を加えられていた。その声点は下記の如くであり、本文と同筆と考えてよいであろう。

- | | |
|---------|-------------|
| ㊦ 長疑計一。 | ㊧ 長疑換疑計一。 |
| ㊨ 換疑計一」 | ㊩ 長換疑米米巨疑一。 |
| ㊪ 長疑計一」 | ㊫ 疑疑米米巨疑一。 |

筆者は竊聞にして、この様な声点体系で加點された具体的な資料を他に知らないが、本資料が天台関係のものとするれば、天台宗系の資料を広く探る事に依って見出し得るものと期待するのである。

ところで、一般に連濁符号として考えられている「㊩」が本資料では「本は濁るが新たに清んで読む字」に加える符号として使用されている事は一応注目に値しよう。勿論かような使用法は、ここに用いられた全ての符号が一つの体系として他と緊張関係を保ちながら使用されているのであって、別の加點者は又別の機能を付与している可能性が存する。例えば、真興加點の醍醐寺本法華經釈文では「㊩」は濁音匣母字に、「㊦」「㊧」は次清音字に加えられており、漢音の声母識別(清濁ではなく)を目ざしているものと見なし得る。南海寄帰内法伝古点では「㊩」は「㊦」と加點者の系統が異なるのみで清濁には関与しない単なる声点として用いられているが如くである。その他「㊩」を次清音字のみに加えた大東急記念文庫本仏母大孔雀明王經なども見られ、同一の符号が種々に用いられている。

従って当然の事ながら「㊩」が果して当該の資料ではどの様な機能を持つも

のであるかは前提として明らかにしておく必要があるわけである。

さて、本稿で連濁追究の資料として取り扱おうとするものは次下に示すものであるが、これ等は全て「:」が連濁を示すものとして用いられていると考えられるが、ただ中に「・」の如く声点を斜めに加えたものが見出される。筆者は始めこれを単純に「・・」の符号の変形として考え移点したのであるが、途中この符号が、必ず同じ字に何度も加点されている事に気づき、この様に斜めに加点されている事に一つの別の機能が付与されているのではないかと考えたのである。

その資料は、大東急記念文庫蔵法華経卷第八南北朝期点で、実例は以下の如きである。

〔婆〕

・婆 49 78 90 312 315 ・婆羅門 65 65 69 221

・婆塞 66 67 ・婆夷 67 68

・乾婆 71 85 165 ・藍婆 173

・頻婆 290

〔陀〕

・陀羅尼 143 146 149 150 156 160 167 171 202 335 337 337 343

・吐陀羅 154 ・多陀伽 206

・佛陀 206 ・草陀羅 327

・施陀羅 336 336 404 ・是陀羅 343 355

(陀羅尼品 122、陀羅尼 131)

〔伽〕

・摩伽羅伽 72 (摩伽羅伽 86)

この三字の例は共に音譯字に用いられたものばかりではあるが、注目すべきは全て全濁字である事、そして共に、法華經音22丁表以下にある「經中文字不審以下私抄也」として掲げられた「清濁不定字」の項目の中の漢字と共通するという事である。この「清濁不定字」は先述した「本新濁未決而濁」「清濁未決而清」と対応していると考えられるから、この大東急本法華經の加點者は、この「婆」「陀」「伽」を清濁不定字、即ち「本の清濁は不明の字」として把握していたのではないかと推定するのである。「・」の如き声点を用いたのは、本資料の符号としての声点が「・・」を本濁、「:」を新濁と區別した為に、法華經音と同じ「:」を使用する事が出来ず、その中間に位置する「・」を使用したと解釈したい。

さすれば、本資料ではその清濁に関しては、とにかく「清音字」「濁音字」「新濁字」「清濁不定字」の四種を區別していたと考えられる事になる。これは、法華經音の場合に比すれば區別の範疇の数は減少しているが、実際にこれだけの區別があったと認められる事は無視出来ない所である。何となれば、少くとも南北朝期の法華經說誦に於いては、本は清音字であるものが濁って読まれる場合、所謂新濁の事象に依る場合のみでなく、そうでない場合にも濁って読まれるものの存在した可能性が出て来るからである。そしてこの可能性を知る事は、既に指摘した「有韻尾以外に下接する場合の濁音化」が果して連濁という術語で把え得るかどうかという問題を引き起す事になるであろう。

例えば、先例の「伽」の場合についてみると、86行目の「伽」には明らかに縦二つの声点を加えられており、連濁例という事になる。しかも上接字は「-a」であるから無韻尾韻に後接した連濁という事になる。然しながら72行目の例に依って、それは或いは誤写にすぎないものである可能性も十分考えられる事になるのである。

本稿は、これ等の連濁そのものの分析を目的とするものではない。然しながら、以上従来連濁として一括論じられて来た所の無韻尾韻の後での濁音化には、又別の原因が追究されねばならないと考えられ、その原因の一つとして、当時の音韻としての各字ごとの清濁が不明の一群があった事を推定したのであ

り、その様に考えられる以上、以下連濁と声調との関係を論じるに当っては、対象としては、有韻尾韻の後の濁音化のみに限定して考察して行くことにしたいと思う。

3 四種相違疏の連濁と声調

書陵部藏四種相違疏字音点には、論文③で既に御指摘がある如く、次の様な連濁符の加えられた例がある。(筆者の調査と多少の出入がある。・は朱点、。は眼点)

衆[・]多⁽¹³⁾ 三[・]種⁽¹⁸⁾

阿[・]真⁽³⁷⁾ (42) (45) (70) (167) (168) (289) (296) (298) (298) (304)

宗[・]法⁽⁴⁶⁾ (205) (314) (314) 三[・]相⁽⁷⁵⁾ (155) 宗[・]中⁽⁹⁵⁾ (213)

前[・]宗⁽¹⁰⁹⁾ 説[・]詮⁽¹¹³⁾ 三[・]縁⁽¹¹³⁾ 三[・]前⁽¹²³⁾ 宗⁽¹²³⁾

縁[・]性⁽¹²⁴⁾ (125) (129) (130) (131) (134) (143) (146)

縁[・]性⁽¹³²⁾ (135) (136) (140) (144) (145) (146) (148) (150) (151) (156) (157) (163) (163) (166) (184) (185) (186) (187) (229) (270) (271) (273)

心[・]心⁽¹²⁵⁾ 心[・]所⁽¹²⁵⁾ 因[・]相⁽²⁰⁴⁾ 女[・]勢⁽²⁸⁵⁾ 相[・]對⁽³¹¹⁾

寛[・]狭⁽³¹¹⁾ (有[・]彼⁽¹³⁾ 破[・]攝⁽¹⁶³⁾)

これ等の例の中で注目すべきは、従来不問にされて来た昆富羅声の連濁例がある事である。これは連濁と声調との関係を考える際には看過出来ないものと考えられる。

まず上の用例について、連濁した字の声調と、連濁した字の直前の字の声調との関係がどうなっているかを数量的に処理してみると次の如くなっている。

連濁字 の声調 上接字 の声調	平	上	去	昆	入	計
平	0	1 (11)	0	0	0	1 (11)
上	0	0	0	0	0	0
去	5 (28)	1 (1)	0	5 (6)	1 (4)	12 (39)
昆	3 (11)	1 (1)	0	1 (1)	0	5 (13)
計	8 (39)	3 (13)	0	6 (7)	1 (4)	18 (63)

(表中¹_(ii)とあるのは1語11例ある事を示す。語とは漢字二字の組合せを便宜呼んだものである。)

この表に依ってみると、まず上接字の声調は、平声—1語11例、上声—なし、去声—12語39例、昆富羅声—5語13例、となっており数量上からは、従来指摘されて来た通り、

去声調の後に最も連濁が起り易く、昆富羅声、平声、上声の順で起り難くなると言えそうである。然しながら、問題は、この数量上の値が、そのまま声調の性格そのものに全て還元出来るかどうかという事である。以下この点から検討を加える。

まず第一に指摘しなければならないのは、従来不問とされた昆富羅声の例である。先稿(注①引用)で指摘した様に、昆富羅声の具体的な声調は上声と考えられるから、四種相違疏では、実際には上声の後に連濁した例は5語13例存在する事になるのである。

つまり、連濁する字に上接する字の声調は本資料では

平声—1語11例、上声—5語13例、去声—12語39例、

という事になり、平声に下接する連濁が1語しか無い事がむしろ注目されよう。

次に観点を連濁した字の声調に移してみると次の様になる。

平声で連濁した例—8語39例

上声 “ —3語13例

去声 “ —なし

昆富羅声 “ —6語7例

入声 “ —1語4例

ここで、毘富羅声は上声の調値を有していたと考えられるから、これを上声にまとめると、上声で連濁した例は、結局9語20例となり、平声とほぼ同値を占める事になる。さてこの結果から注目すべきは、去声・入声で連濁した例が無い乃至は殆んど無いという事である。この中、入声字に少ないのは、恐らく全体として入声字の出現数そのものが少ない事と関連ある事象と考えられ、他の原因は考えにくい様である。

去声字に見られない事に関しては次の様に考えられる。

先稿に指摘した様に、上一去、去一去と声調が続く場合の下の去声は、異音に於いては上声に変えて用いられて来た。これに対して、平一去、入一去の場合はそのまま用いられた。この現象を、連濁の立場から見れば、連濁は拗音韻尾の後に原則として起る現象として扱えた。従って、声調の組み合わせとしては、入一去の場合は除かれるから、結局去声調で連濁する可能性を有するのは、平一去という声調の組み合わせの場合のみに限定されるのである。

本資料で毘富羅声の加えられている連濁字6語7例は、いずれも上接字は去声又は毘富羅声(実は上声)であって、明らかに去声から変化したものである事を示す。仮りにこれ等が声調変化を蒙らずに連濁したならば、これ等6語7例は去声連濁字の例になるはずのものである。

この様に、去声で連濁となる可能性は、声調の組み合わせ上、既に、平一去のみという限定を蒙っていると考えられるのであり、本資料で去声連濁字が無いのは正にこの為と考えられる。但本資料に、その平一去という組み合わせにも連濁例が見られない事が意味があるかどうかは不明である。そもそも本資料全体での連濁例は全体量に比して非常に少なく、或いは連濁現象のこれが初期の実態かとも考えられるが、ともかくも、細部に亘る追究に耐え得る現象数ではないので、残った問題は次の資料を勘案して追究することにする。

以上、本資料に依って指摘出来るのは次の点である。

① 声点のみから見れば連濁する字に上接する字の声調に上声が少なく思われるが、実際は毘富羅声の調値が上声と考えられる所から、上声が上接する例も存在し得る。

② 去声調で連濁する例が少ないのは、声調の組み合わせ上、平—去の場合しか存在し得ない為に、下接する去声調音節の絶対的減少が起るからである。

4 大東急記念文庫本法華經卷八の連濁と声調

この資料は四種相違疏よりかなり下り、大略南北朝中期の加点にかかると思われる春日版字音点である。同じく毘富羅声が使用されており声調変化の実態をよくうかがう事が出来、又連濁が「:」で区別されており、四種相違疏で推定した所を更に深く見る事が出来ると考えられる。

まず連濁の実例を抜出す。初出の1例のみを取り上げ()内にその行数を示す。()内は用例数。

蓮華 (1) (4)	觀世 (1) (36)	衆生 (5) (23)	音聲 (6)
瑠璃 (11)	眞珠 (11) (2)	三千 (17) (3)	恭敬 (30) (5)
端正 (36)	功德 (43) (13)	聞身 (54)	王身 (54) (4)
天身 (56) (4)	軍身 (59)	門身 (60) (4)	長者 (62) (3)
官身 (64) (2)	等身 (72)	金剛 (73) (2)	種種 (75) (5)
衆寶 (80)	仁者 (81) (2)	珍寶 (81)	方所 (93)
弘誓 (94)	見身 (95) (2)	念彼 (96) (13)	身者 (102)
尋聲 (106)	神通 (109) (8)	現身 (109) (2)	官處 (114) (114)
障中 (114) (114)	衆中 (120) (2)	等等 (120) (120)	經者 (125) (6)
經卷 (125) (2)	善哉 (145) (7)	勇施 (148)	門天 (159) (159)
精氣 (176)	幡蓋 (198)	瞻蔔 (199)	養者 (201) (201)

檀波 (210)	巖三 (215) (2)	王子 (223)	神変 (224) (3)
空中 (228) (5)	歡喜 (231) (2)	廣説 (235)	難値 (243) (2)
平正 (269)	千歳 (272)	精進 (272) (2)	変化 (275)
善知 (276) (4)	善根 (277) (2)	顯照 (288)	紺青 (289)
讚歎 (291)	中生 (299) (2)	東方 (308)	山中 (313)
三者 (320)	精進 (340)	閻浮 (356) (2)	當生 (360)
轉法 (398)	今世 (396)	千世 (404)	身體 (400)

撥音尾以外に下接する連濁符例

愛敬 (38)	釋身 (55) (2)	夷身 (68)	羅伽 (86)
隨喜 (156)	値浮 (246)	華三 (250)	佛集 (253)
作比 (266)	大功 (300)	舍閻 (327)	(是等は算定しない)

(a)表

上接字の声調 \ 連濁字の声調	平	上	去	昆	入	計
平	9 (26)	2 (5)	5 (14)	2 (3)	2 (2)	19 (49)
上	1 (1)	0	0	1 (23)	0	2 (24)
去	15 (58)	5 (11)	0	10 (25)	0	30 (94)
昆	7 (15)	0	0	11 (23)	1 (13)	19 (51)
計	32 (100)	7 (16)	5 (14)	23 (73)	3 (15)	70 (218)

以上の例を先の四種相違疏と同じ様に処理すると左の様になる。

先に述べた様に、昆宮羅声の実際の調値は上声と考えられるから、左の表を実際の調値に従って整理し直すと、次の如くにまとめる事が出来る。

(表 b)

連濁字の 上接字の 声調	平	上	去	入	計
平	9 (26)	4 (8)	5 (14)	2 (2)	19 (49)
上	8 (16)	12 (46)	0	1 (13)	21 (75)
去	15 (58)	15 (36)	0	0	30 (94)
計	32 (100)	30 (89)	5 (14)	3 (15)	70 (218)

これに依ってみると、まず上接字の声調は去声調が最も多いが、上声及び平声字にもかなり見出されるのである。但し、毘富羅声を上声に振する前の表 a で見ると、上声の下で連濁している例は 2 語 24 例であって、去声及び平声と比較すると圧倒的に少ない。これは一面からは当然の事象と言う事が

出来る。何となれば、捲音尾を有する上声字は、異音に於いては他の声調と比較すると相対的に少ないからである。従来から説かれている様に異音に於ける上声対去声は一音節対二音節に対応するのである。この点については、細部に亘ってはなお追究を要する問題はあるにしても、大勢としてかような傾向を否定する事は出来ない。今捲音尾を有する字についてみると、異音では通振の ng 韻尾を有する字群が「フ」「ク」「ツ」「ル」「ユ」等と一音節表記される以外は全て二音節表記されるのであり、それ等は上声ではありにくいのである。つまり、異音に於いて捲音尾を有する上声字はそれだけ限定されてしまっているのである。従って、当然の事ながら、上接字が上声調である連濁の出現の可能性もそれだけ限定されているわけであって、表 a の実情はそれを物語っている。

毘富羅声を用いない資料では、声調変化した結果の上声そのままで差声される事は先稿で指摘した。従ってその様な資料での、連濁字に上接する上声調の中には、かなり多くの声調変化後の上声例が含まれている事は注意すべきである。

さて、次に表 b で見ると、連濁した字の声調は、平声と上声がほぼ 30 語で同値を示すが、去声と入声は前二者と比較すると、圧倒的に少ない。これは四種相違疏の場合と同じ様な傾向を示す。

この中、去声字の連濁例について見ると、5 語 14 例全て上接字は平声である事は注目すべきである。これは四種相違疏で推定した様に、去声連濁字が少な

い、という事の原因に声調変化が影響しているのである。

つまり表 a で見れば解る様に、去声連濁字と毘富羅声連濁字とは、上接の平声と上・去・毘富羅各声に対して相補う分布を示しているのである。即ち、上接字が平声ならば去声連濁字となり(計5語14例)、上接字が上声・去声・毘富羅声ならば毘富羅声連濁字(実は上声連濁字)となるのである。

従来去声調に連濁が少ないと言われて来たのは当然と言えるのであって、具音に於いては、平—去と声調がなる場合はあり得ても、上—去、去—去とは並び得なかつたのである。従って去声で連濁を起す声調環境はそれだけ減少する事になるはずなのである。

この事は、去声連濁字が少ないという事象の原因が、桜井氏の説かれる如く、去声調の調値そのものが連濁を引き起しにくい要因を有するものではなく、奥村氏の見方の正しい事を裏付けるものである。平—去と続く場合の連濁例は5語14例見出される事は、この様に、声調の組み合わせがあり得る場合には、去声調でも連濁は起り得るのである。

入声の連濁例が少ないのは、恐らく入声字そのものの出現数の少ない為であろう。

5 聖衆来迎寺本法華経字音点の連濁と声調

⑦

先の二資料は、毘富羅声点が用いられ、連濁符は「:」が使用されていた。本資料は毘富羅声点是用いられていず、連濁は「◦」の如き符号で區別されて

連濁字 の 声調 上接字 の 声調	平	上	去	入	計
平	15 (28)	4 (5)	5 (5)	12 (14)	36 (52)
上	10 (16)	4 (14)	1 (1)	3 (3)	18 (34)
去	18 (31)	22 (26)	1 (1)	5 (5)	46 (63)
計	43 (75)	30 (42)	7 (7)	20 (22)	100 (146)

いる。

本資料の連濁例は論文③で取り上げられているので、それに譲る事にする。

例によって連濁字と上接字の声調との関係を数量上より見ると次の如くである。

(連濁符の誤点と考えられるもの

は除外した)

まず連濁字の上接字の声調についてみると、本資料でも去声が多い。先に見た二資料に共通する所である。この様に上接字に去声調が多い事は論文①③で指摘されて来た所であり、論文①で奥村氏は次の如く解釈されている。「鼻音尾を伴う字音に於いて、その声調が上昇型である場合は、アクセント契機が後の鼻音の部分におかれる為、その鼻音のソノリティが非常に大きくなる—或は大きくなる様に感ぜられる—管であり、従って、その様な場合、後接する字音が連濁を起し易いというのは、極めてあり得る事なのである。」この様な見方は筆者も確かに有力なものと考え。但し問題になるのは、やはり同氏も述べられている如く、平・上声の数値の対立が真に去声連濁の優位を示すものかどうかという疑問が残る事である。そこで氏はこの疑問に答える為に、逆にどの声調が上接した場合に連濁していないかを見、その結果、去声と比較し平声上声の場合の方が連濁しない比率が高い事を示されている。筆者も、この方向から本資料を調査してみたが、やはり平声上声の方が去声と比較し連濁しない比率が高いのである。いままで見て来た三資料に於いて連濁字に上接する字の声調に去声のものが最も多い数量を示すのは、やはり去声調の上接する場合が最も連濁し易い事を物語っていると考へたい。

さて次に、連濁した字の声調についてみると、平声と上声とは大略同じ出現数を示している。そして平声の連濁字の場合は上接字は大體平等に平上去声が見られているが、上声の連濁字の場合、上接字に去声のものが圧倒的に多いのが注目される。これは明らかに声調変化の影響である。今この当該例の22語を掲げると次の如きものである。

音軌 東方 神通 曼殊 怪貧 群生 音聲 心中 暖經 黃金 天華
東西 人間 但當 衆生 三車 堂舍 眞珠 更生 香水 金身 衆多

既述した如く、呉音の上声字は大部分一音節である。右の例の中から、連濁字が一音節のものを拾ってみると「曼殊」「天華」「三車」「堂舍」「眞珠」「衆多」の6例であり、この例は元から上声であった可能性が強いが、その他の二

音節の例は、上接字が去声である為に、その影響に依って去声から変化したものである可能性が強いのである。従って、結果的には上声連濁字はほぼ平声連濁字と同じ比率を占めるのではあるが、声調変化に依って上声となったものの比率が非常に多いのである。この点は先に考察した2資料とも全く共通する所である。

付言すれば、上一上と接続する場合の

三_○母 寧_○寧 寧_○州 寧_○母

の諸例も、連濁している字はいずれも二音節字であるから、声調変化した為に去声から上声へ移ったものである可能性が強いのである。

さて、以上の如く、連濁字の中に去声から上声に移った為のものが多いとなれば、去声字の連濁例の減少という事象が起るのは当然と言えよう。去声連濁字の中、上接字の声調が上声及び去声の例は各一例しかない。しかもそれ等は「_○長_○寧」「_○細_○寧」の如く、上声去声両方の声点に加えられており、去声の方は、他例を勘案するならば明らかに異例に属するものである。(なお「_○長_○寧」は去声の場合のみ連濁し、「_○細_○寧」の場合はどちらの場合にも連濁する事を積極的に示しているものかどうかは詳かでない)。この例外となるもの2例を取り去ると、結局、去声で連濁している例は、「_○長_○寧」「_○お_○長_○」「_○寧_○州」「_○寧_○州」の如く、全て平声から続き、声調変化をまぬがれた例なのである。この様に、四種相違疏及び大東急記念文庫本法華経での事象は、本資料に於いても全く同様に起っているのである。

最後に入声の連濁字についてみるに、本資料ではかなり多くの例が見出される。これは入声字であっても連濁する可能性は他声の場合と全く同様に有り得る事を示していると見得る事象であろう。

6 大東急記念文庫本法華経卷八鎌倉初期点の連濁と声調

大東急記念文庫蔵法華経の中、本資料は鎌倉初期書写加点の字音点で巻七、巻八の二軸が存する。本稿では巻八のみを対象とする。全巻に朱の声点に加え

られているが、その声点は、「:」で連濁を示し、昆宮羅声は使用されていない。

※ ず連濁の実例を4の場合と同様に抜き出すと次の如くである。

觀世 (1) (36)	衆生 (5) (22)	音聲 (6)	淺處 (10)	珊瑚 (11)
眞珠 (11) (2)	船舫 (12)	三千 (17) (3)	滿中 (18) (2)	檢點 (21)
恭敬 (31) (5)	端正 (37)	功德 (43) (14)	聞身 (56) (4)	天身 (58) (4)
軍身 (61)	門身 (62) (3)	長者 (64) (3)	官身 (66) (2)	種種 (77) (6)
珍寶 (83)	弘誓 (96)	念彼 (98) (13)	身者 (105)	尋聲 (108)
神通 (111) (9)	官處 (116)	衆中 (123) (3)	等等 (123)	經者 (128) (7)
經卷 (128) (2)	侵毀 (152) (5)	善哉 (153) (8)	勇施 (156)	門天 (168)
精氣 (186)	短者 (189)	幡蓋 (209)	瞻蔔 (210)	養者 (212)
檀波 (221)	禪波 (222)	光三 (225)	明三 (225)	殿三 (226) (2)
住誦 (229) (2)	人衆 (231)	王子 (234)	神變 (235) (3)	空中 (238) (6)
廣說 (246)	發波 (253) (2)	後宮 (260) (2)	共誦 (268)	三市 (269)
千歲 (283)	精進 (283) (3)	變化 (286)	善知 (287)	善根 (288) (3)
顯照 (299)	紺青 (300)	讚歎 (302) (2)	中生 (310) (2)	勸發 (317) (2)
東方 (319)	蓮華 (320)	山中 (324)	三者 (331)	舍闍 (338)

人者 (339) 歡喜 (346) (2) 國野 (368) (2) 轉法 (402) 典者 (404) (3)
 今世 (408) 現世 (410) 身體 (412) 千世 (416)

捲音尾以外に下接した連濁符例

敬 (38) 大身 (239) (以上二例算定に入れない)

これ等の例を先と同様に統計的に処理してみると、次の如くなる。

連濁字の 声調	平	上	去	入	計
平	13 (42)	4 (7)	7 (18)	4 (5)	28 (72)
上	8 (18)	15 (52)	0	1 (14)	24 (84)
去	14 (56)	12 (24)	0	1 (1)	27 (81)
計	35 (116)	31 (83)	7 (18)	6 (20)	79 (237)

まず連濁字の上接字に注目して本資料の特徴と見られるのは、平・上・去各声に殆んど差が見られないという点である。恰も上接字の声調は連濁の要因とはならないかの印象を受けるが、既に見て来た様に、これは、大勢とは傾向を異にする事象なのであって、やはり本資料独自の事象として把握すべきであろうが、そ

の原因は詳かにしない。

次に連濁した字の声調についてみる。平声の場合は上接字が平・上・去各声ほぼ平等に分布しているが、上声・去声の二声調の場合は声調変化の影響が歴然としている。即ち上声連濁字の上接字に上声・去声のものが多く、去声連濁字の上接字に上声・去声のものが一例も見られないのであって、これは、屢々指摘して来た如く、上一去→上一上、去一去→去一上の声調変化を蒙った事を示していると考えられる。この傾向は、先に見て来た諸資料と共通する所であり、それ等と同方向で論じ得る資料の一であると考えられる。

7 書陵部蔵大方広仏華嚴經寿永点の連濁と声調

ここで、字音直説資料以外の、所謂訓点資料を取り上げ訓読された文中にある漢語の場合についてその実情を分析してみたい。

本大方広仏華嚴經の連濁例についても論文③で論じられている。その結論として「連濁の例が多いが、前接字は鼻音のみであり、しかも去声調が多く、平声調がこれに次ぐ。連濁した字音の声調は、平声調が多く、去声調は「籍」の一語である」と述べられた。

さて、筆者も小林先生の御厚意により御移点本を拝借調査した。連濁と思われるものは次の諸例である。

- | | | | | | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 心 ^{..} 性 ^{..} (126) | 音 ^{..} 聲 ^{..} (219) | 機 ^{..} 梅 ^{..} (228) | 轉 ^{..} 法 ^{..} (235) | 三 ^{..} 世 ^{..} (240) | 動 ^{..} 修 ^{..} (249) | 群 ^{..} 生 ^{..} (253) |
| 塵 ^{..} 數 ^{..} (267) | 難 ^{..} 息 ^{..} (267) | 境 ^{..} 界 ^{..} (278) | 人 ^{..} 中 ^{..} (322) | 往 ^{..} 昔 ^{..} (324) | 善 ^{..} 根 ^{..} (331) | 灌 ^{..} 頂 ^{..} (342) |
| 歡 ^{..} 喜 ^{..} (348) | | | | | | |

(上例の中、声点のない「心」「三」「聲」の声調は、本資料の他所での例及び他の呉音資料に照して、それぞれ「去」「去」「平」と考えられる)

字音直読資料に比すれば連濁の絶対量は少ないが、当時の呉音読漢語の連濁の実態を知る貴重な資料である。整理してみると次の様になる。

通濁字の 声調	平	上	去	入	計	
上接字の 声調	平	2 (2)	1 (1)	1 (1)	2 (2)	6 (6)
上	0	0	0	0	0	
去	3 (3)	6 (7)	0	0	9 (10)	
計	5 (5)	7 (8)	1 (1)	2 (2)	16 (17)	

ここで注目されるのは、上接字に上声の例が一例も見られない事である。これは単に連濁の絶対量が少ない為の偶然とは考えられない。なんとならば漢語の場合には、連濁する字の上接字に上声が来る可能性が非常に限られているからである。この事情を図示すれば次の如くなる。

漢語——㊤+㊤ (二字漢語が多い)

字音直読—㊤+㊤+㊤

今㊤を連濁する字、㊤を上接する上声の声調を有する字、㊤を更にその上に接する字、とすると、㊤は当然鼻音韻尾を有する字となるわけであるが、既述

した様に、上声で鼻音韻尾を有する字は原則として通摂字の僅かしか呉音には存在しないのである。従って、漢語の場合には、その僅かの字が来た場合のみ当該の例となって現われて来るにすぎない。ところが字音直読資料の場合には、①に上声又は去声が来る場合には下接する(即ち④の位置にある)去声が上声に変化し、当該例となるケースがあり得るのである。

かようなわけで、漢語の場合には、更に本資料以外に範囲を広げても、上接字が上声になる場合は非常に少ない、と考えられるのである。

又、上声字で連濁する例が多いのは、ここでも声調変化が影響し、本来去声であったものが上声へ移り連濁例となった為である。その証拠に、当該の例七例の中、六例まで上接字は去声調であり、逆に、上接字が平声と思われる「纏」は去声のまま連濁しているのである。

従って、本資料の如く、訓読文の中に漢語が読み込まれる様な場合の連濁も亦、字音直読資料の場合と同じく、声調変化との関連を如実に見せるのである。

筆者の今まで調査した範囲についてのみ言えば、院政以後の呉音読資料の場合には、殆んど例外なく声調変化を起していたと思われる。従って、連濁と声調との関係については、以上述べて来た所が大体に於いて呉音読資料全般に当てはまるのではないかと考えられる。論文③に於いて指摘されている、その他の漢語としての連濁例についても、適合させる事が出来るのであるが一々についての例証はここでは省略する。

8 結 論

以上、従来問題とされて来た連濁と声調との関係について、筆者の立場から追究して来た所を要約すれば、次の如くなる。

イ、連濁する字に上接する字の声調は各文献を通じて、去声調の比率が最も多い。これはそのまま、去声調という上昇調の調値に於いて、下接する無声字音を有声化させる力が最も強かった事を反映すると考えられる。

ロ、連濁する字の声調は逆に去声調である比率が一番少ない。これは、声調変

化を蒙り、語中語尾に立つ（或は下位に立つ）去声調が上声に変化して、去声調音節が絶對的に減少した為の見かけ上の現象にすぎず、連濁する字の声調は、連濁するかしないかの要因とはならないと考えられる。

ハ、従って、連濁という事象は、上接字が鼻音韻尾を有する去声調の字である場合に最も起り易い。

さて、この結論は、従来奥村説と桜井説と対立していた点については、奥村説を裏付けた事になる。この様に、桜井説と相対立する結論に達したのは結局、桜井氏が、声調変化を南北朝以後の発生でありそれ以前には存在しなかったとされた為、及び氏が取扱われた基本資料が、補忘記の注記という一般読誦音と性格を異にするものであった事に依ると考えられる。補忘記そのものは根来寺の名目集であり、その注記は根来寺、北嶺、南都、南山、寺門、山門等各派の名目が相互に異なるものに加えられたものであって、それ自身性格が雑多なものを包み込んでいるのである。従って、その様な注記に依って導き出された結論は、そのままそれが呉音全般に当てはまるとは考えにくいのである。

以上要するに、連濁と声調との関係は、これを複合現象として把握する必要がある事を指摘したいのである。量的現象がそのまま質的現象に対応するとは限らないのであって、背後に存在する実質的な現象を正しく把握する必要があるのである。

尚、最後に付け加えておくべき事は、現象の発生としての連濁と声調変化との先後の関係である。この点については更に広く資料をさがして追究に俟たねばならない所である。ただ、その問題は、歴史的な現象としては追究されるべき意義は存するのであるが、両者の積極的な影響関係という点からは、先後は特に意味を持たないと考えられる。つまり、以上追究した所から解る様に、連濁すれば声調変化しない、或は、声調変化すれば連濁しない、という様な現象は全く見出されないからである。声調変化は、連濁を引き起す、或は、引き起さない要因としては働いていないのである。（46. 8. 20）

〔注〕

- ① 「毘富羅声の機能」（『国語学』84集）
- ② 浜田敦「連濁と連声—同化の問題—」（『國語國文』29の10）
- ③ 尤も、入声韻尾の中、舌内入声韻尾の場合には、古く「ン」と、舌内撥音と同じ符号で表記されたものが屢々見出され、実質的には鼻音韻尾と同じ音価を持つ場合があったとも考えられる。この様な特殊な場合は勿論事情は別である。
- ④ 岡本勲「日本漢字音に於ける頭子音の清濁—韻鏡清の字にして日本字音濁となるものに就て—」（『國語國文』37の12～38の1）
- ⑤ 吉田金彦「法華經積文について」（『國語國文』21の2）
馬淵和夫「醍醐寺三宝院蔵『法華經積文』の字音について」（『第24回訓点語学会発表』）
小松英雄「醍醐寺三宝院蔵『妙法蓮華經積文』にほどこされた声点」（『日本声調史論考』所収）
- ⑥ 奥村三雄「音節とアクセント—異音声調の国語化—」（『國語國文』22の11）
黒沢弘光「日本漢字音の声調体系における上声」（昭和45年春期国語学会）
- ⑦ 築島裕・小林芳規両先生の御移点本を拝借して調査した。
- ⑧ 小林芳規先生の御移点本を拝借して調査した。

〔後記〕本稿作成につき小林芳規先生の御助言を忝うした。亦資料調査につき山陰部・大東急記念文庫各当局の御助力を得た。合わせ記して深甚の謝意を表す次第である。

（国語学国文学助手）

We may say that this influence formed the basis of Bizan's mind and built up one of his literary positions.

Dissatisfied with the literature of Kenyusha school, Bizan groped for his ideal world of literature and came to find one of his conclusions under Ichiyo's influence. Therefore, Bizan's literature essentially tends to take up seriously the problem of literature and human existence.

On the Relation between *Rendaku* (連濁) and Accent in Sino-Japanese

Katsuaki NUMOTO

There is no authentic explanation about the relation between *Rendaku*, a phenomenon in which the initial voiceless sound of the second member in Sino-Japanese compounds tends to turn voiced, and the accent.

The conclusion drawn from my study is as follows:

- 1) *Rendaku* occurred most frequently when a departing tone (去声) was preceded by it.
- 2) *Rendaku* occurred most slightly when the accent of *Rendakuji* (連濁字) was a departing tone. This was because the accent of the second member of the compound changed from a departing tone into a rising tone (上声).